

## ■ 夢はカタールで ■

勝負とは、かくも残酷なものか。W杯ロシア大会、日本は2点をリードしながら、ベルギーに逆転され8強入りを阻まれた。非難を浴びながらも1次リーグを突破して得た、3度目の決勝トーナメント挑戦だった。

F I F Aの世界ランキングは、ベルギーの3位に対して、日本は61位。実力差は歴然である。だが、これまでの戦いぶりから、サプライズが起きそうな気配が満ちていた。ワクワク感が半端なかった。

未明3時のキックオフに合わせて起きようと、早めに床に就いたが、目が冴えて、前夜23時開始のブラジル対メキシコ戦を見てしまった。その後布団に入るも、結局1時間しか眠れず、頭の中がぼーとしたまま試合が始まった。

後半3分、柴崎からのスルーパスを受けた原口が先制すると、その4分後に乾が目の覚めるようなミドルシュートをたたき込んだ。これは行けるだろうと、いそいそと準々決勝ブラジル戦の日程を調べる。その後うまくゲームを運んでいたが、後半の24分、相手にふんわりとヘディングされたボールが川島の頭上を越えてゴールに吸い込まれていった。ああ、1点を返されてしまった。日本にとっては不運な失点。いやな予感がした。

しかし、まだ1点リードしている。なのに、こんな時に限って試合の流れは一変する。ベルギーは攻勢に出て、5分後に同点。こうなれば追いついた方がイケイケである。アディショナルタイムの終了直前に、キーパーのスローから、ベルギーの絵に描いたようなビューティフルカウンターが決まる。明け方の我が家に絶叫が響いた。

2-0からのまさかの逆転サヨナラ負け。私もTVの前で茫然自失。そして深く嘆息した。明日から何を楽しみに生きていけばいいのだろう。完全にW杯ロスだ。ふう、早く立ち直らねば。

考えるに、ボールの蹴り合いのたかがゲームに、無我夢中になるのはなぜだろう。一つのスポーツに国中が一体となって応援するのはどうしてだろう。いったい何が世界を熱狂させるのだろう。

3度、8強の壁に撥ね返された。でも、確実に日本と世界の差は縮まっている。「試合終了のホイッスルは、次の試合のキックオフの合図である」とは、サッカーでよく使われる言葉だ。誰が決めたか、4年に1度。持ち越した夢はカタールで掴みたい。